

松 山 大 学 論 集  
第 21 卷 第 1 号 抜 刷  
2 0 0 9 年 4 月 発 行

## テレビ・タレントに関する一考察

作 田 良 三

# テレビ・タレントに関する一考察

作 田 良 三

## 1 はじめに

フリーターやニートが問題視されるなか、キャリア教育の必要性が叫ばれている。また、学力低下問題をはじめとして、学校教育・高等教育における能力形成に関しても注視が集まっている。本稿は、こうしたキャリア教育や能力形成を問題関心としつつ、ひとつの職業に注目する。すなわち、テレビ・タレントである。

ひとまず、学校教育や高等教育の点から歴史的に振り返ってみよう。まず明治期における「学事奨励ニ関スル被仰出書」（1873）のなかで、学問が「身ヲ立ルノ財本」と表され、公教育の普及が図られた。実際に公教育が普及するにはそれから数十年の歳月を要したが、立身出世の道として、学校教育が果たした役割は大きい。それは、進学することによって立身出世できたという事実があるというよりむしろ、進学することによって立身出世できるという期待を人々に抱かせたという点で大きいといえるだろう。

戦後は、農民階層子弟の進学増加を背景に、1960年代に高校進学率が上昇し、1974年には90%以上の進学率を示し、大学・短大への進学率も1973年には30%に達している。1960年代の農民階層子弟が「不利にならない程度の『ささやかな』期待」（苧谷 2001, 49頁）を将来の職業に対して抱いていたように、進学増加の背景には学校教育に対する期待があったことは否めない。また、高等教育（進学）に対する受験生の意識が、おおよそ昭和40（1965）年以降、立身出世競争から、分相応な柄獲得競争に移行したという指摘もあるが

(竹内 1991), 大学・短大への進学率は30%台を維持しつつ, その後90年代に入り40%台に突入している。

また, こうした受験競争の激化に呼応して, 保護者の教育熱の高騰も指摘されている。たとえば, 1960年代後半からは, 「教育ママ」ということばが登場し, わが子の大学合格のため, ひいては将来の(就職の)ため, 多くのエネルギーをつぎ込む保護者がクローズアップされたのである。山田(1997)は, 高度経済成長期のあいだに, 「子どものために尽くすのが親の務めというイデオロギーが普及」したと指摘している(山田 1997, 90頁)。

こうした高等教育の大衆化は, 受験生たちの教育期待・キャリア観形成にも少なからぬ影響を及ぼしていく。また, 経済的に豊かな社会になるなか, アイデンティティの形成や「自分探し」を標榜に, 「自分ならではの」キャリアを追求することが, 人々のあいだでひろく許容されていく。さらに, 少子社会にあっては, 保護者がわが子に対して, 金銭的にも心情的にもエネルギーを費やしやすと考えられる。受験生のみならず, 児童生徒は, 「有名大学を出て有名企業に就職する」ということではなく, 違うかたちで身を立てようとする可能性があり, 保護者もその考えの支持者となりうる。そうした自分ならではの自己実現をかなえる職業の一つとして, テレビ・タレントが挙げられるのである。

テレビ・タレントは, 若者にとって魅力的な職業である。フリーター問題が叫ばれて久しいなか, フリーターの類型化を試みた小杉(2003)は, その一類型として「夢追求型」を挙げている。そして, その「夢」の多くは, バンドや俳優などの「芸能志向型」だという。また, ベネッセ教育研究所の調査(2004)によると, テレビ・タレント(歌手・声優・お笑いタレントなどの芸能人)は, 男女ともに, 小中高生の将来の夢の上位20位以内にランクインするほどのあこがれの職業である。

このように, 小学生から若者までの世代にとって, 魅力的であこがれの職業であるテレビ・タレント。だが, こうしたテレビ・タレントになるために具体

的にどうすればよいのかは、必ずしも明確ではない。養成所やオーディション、あるいはスカウトなど、タレントになるための経路はいくつか挙げられるが、タレントになるために必要な能力については、なかなか具体的なものが見えにくいのではないだろうか。それはよく、素質や才能、実力といったことばで表現され、あたかも先天的に適性が確定しているかのように語られることも少なくない。

また、運や境遇がタレントデビューの成否にかかわるともよく言われる。ただ、単に「運がよかった／わるかった」というだけでなく、「運も実力のうち」という語りもあれば、『『時間がない』と言って諦めてしまえる者、『しょうがない』と言って挫折から立ち直れない者は、そのことをもって、やはり才能がなかったのだと言わざるを得ない』（長山 2003, 85-86 頁）というとらえ方もあり、運や境遇が実力や才能と関連づけて語られることは少なくない。この関係性について、万人に納得されるかたちで明瞭に説明することは難しいのかもしれない。

ただ、岡本・福田（1966）は、タレントとは大衆的な才能の持ち主、とりわけ「マスコミをつうじて私たち大衆の心をとらえ、私たちを説得し、ときには私たちと話しあう」コミュニケーション能力を持った人だと指摘する（岡本・福田 1966, 3-4 頁）。また鴻上（2006）は、俳優に必要なものとして「演技力（作者の言葉を伝える技術）」、「自分の一番恥ずかしい部分、隠したい部分をさらけ出す勇氣」、「広く浅いさまざまな知識」、「存在感（内面に積み上げたモノの総量）」、「自己プロデュース能力（自分に合った仕事を見つけ、自分を売り込む能力）」などを挙げており、さらに何よりも「夢を見続ける力」が大切だと述べている<sup>3)</sup>。

香山（2004）は、「自分は特別」と考え、自分の置かれた現状に「こんなはずじゃない」という誇大自己をもつ若者が多いものの、それを俳優やミュージシャンといった「何か具体的な職業イメージには結びつけることができない人」（香山 2004, 124 頁）が増えていると、大学生のカウンセリングをとおして

経験的に感じている。鴻上は「夢を見続ける力」について詳述していないのだが、そこには、具体的な職業イメージをもち、その一方で誇大な自己イメージを持たぬよう自己分析をする力が含まれていると考えられるのではないだろうか。つまり、鴻上が指摘する諸能力は、後天的な「努力」によって培えるものと捉えることができるだろう。

とはいえ、こうした能力が必要だとしても、その能力の有無を判断するのは、これまた難題だといえよう。学校の成績や学力で測れるのか、違った判断方法が他にあるのか、またそうした能力をいつ誰が見極めるのかは、なかなか容易な問題ではない。いつまでにそうした能力を身につければよいのかも、まったくもって不透明である。それでもなお、俳優などのタレントになるという夢を見続け、フリーターを続ける若者がいる。さまざまな指南書(たとえば、相徳(1999)や山本(2001)など)が出版されているが、必ずタレントになれるという経路があるわけではなく、「夢を諦めたらタレントにはなれない」という強迫観念すら与えかねない。本田(2005)は、フリーターの問題を考える際に、正規労働市場／非正規労働市場という二項対立図式だけでなく、実際になれるかどうか分からないテレビ・タレントのような特殊労働市場要因を考慮に入れる必要性を説いている。

また、片瀬(2005)の調査によると、これらの職業に就くことを模索する中高生というのは、低学力の高階層出身生徒に多いという。そこには、勉学・学業という努力から逃避し、不確かな「実力」を拠りどころとして、華やかな職業(芸能関係)へと安易に進路選択をする中高生像が想起される。つまり、中高生は、学力や学歴を必要としない職業として、芸能関係の職業を思い描いているのであろう。

このように、タレントという職業は、子どもにとってあこがれの職業であると同時に、それゆえに、フリーター問題やキャリア教育と切り離しにくいものである。とはいうものの、これまでテレビ・タレントに焦点を当てたアプローチがなされていないのも事実である。そこで本稿では、テレビ・タレントとし

て活躍している人々がどのような人々なのか、その経歴にどのような特徴があるのかを調べることにする。その根本には、「実力があればタレントになれる」、「タレントになる機会は均等に開かれている」、「タレントになるのに学歴は必要ない」などの言説を検証したいという意図がある。

なお、本稿における分析は、テレビ・タレントに「結果的に」なり得た人々を調べるということであるため、どうすればテレビ・タレントになれるのか、どんな能力を伸ばせばタレントになれるのか、ということに対して直接回答を出すものではない。佐藤（2000）によれば、「機会の平等が守られているかどうかは『後から』しかわからない」（佐藤 2000, 168 頁）のであり、結果は保証されていないのである。これはタレント分析についても当てはまることであり、職業選択の時点における検証は難しく、本稿のように、「結果的に」現在タレント活動をしている者に関して、「後から」の（限られたデータに基づく）検証にならざるを得ないと考える。

## 2 分析の対象と視点

### (1) 分析対象

まず、現在どれくらいのテレビ・タレントが活躍しているのかを確認しておきたい。そのための資料として、本分析では「テレビ・タレント人名事典（第6版）」（日外アソシエーツ社、2004年6月発行）を用いることにする。この人名事典には、テレビや映画等の分野で活躍中の人物8,500名超について、活動分野や生年、学歴・経歴などが記載されている。

本稿では、このなかの「活動分野」として、「タレント」、「俳優」・「女優」のいずれかが挙げられている者のうち、1985年以前に生まれた者を分析対象とする（以下、「タレント」と表す）<sup>2)</sup>。後述するが、高等教育進学に関する分析も視野に入れている。そのため、この辞典掲載（2004年）時に18歳未満である（1986年以降に生まれた）者は、高等教育進学動向が不明であり、分析対象から除外することが適当だと考えられる。なお、分析対象者数は3,773名である。

## (2) 分析の視点

分析には主に、①生年、②出身地(首都圏、京阪神・中京、地方)、③デビュー時の年齢、④学歴(大卒・短大卒)、⑤大学・短大における専攻分野を取り上げる。

図1は分析の概念図を示しているが、分析の視点は、大きく2つ挙げられる。ひとつは、本人の出自がタレントというキャリアに影響しているのかという点であり、図1中の矢印Aに相当する。タレントには、素質や実力があれば誰でもなれるというイメージがあるかもしれない。他方、親がタレントであればタレントになれやすいというイメージもあるかもしれない。言うなれば、境遇に関係なく、素質や実力のあるすべての者に、その機会が開かれているのかどうかを検証するのである。

機会均等に関しては、本来、さまざまな要因を考慮する必要があるだろう。ただ本稿では、出自に関するデータが十分とはいえないこともあり、タレントになるのに、①出身地が関係あるのか、②親(祖父母)の職業が芸能関係である(あった)ことが関係あるのか<sup>3)</sup>という2点について、生年(世代)とデビュー

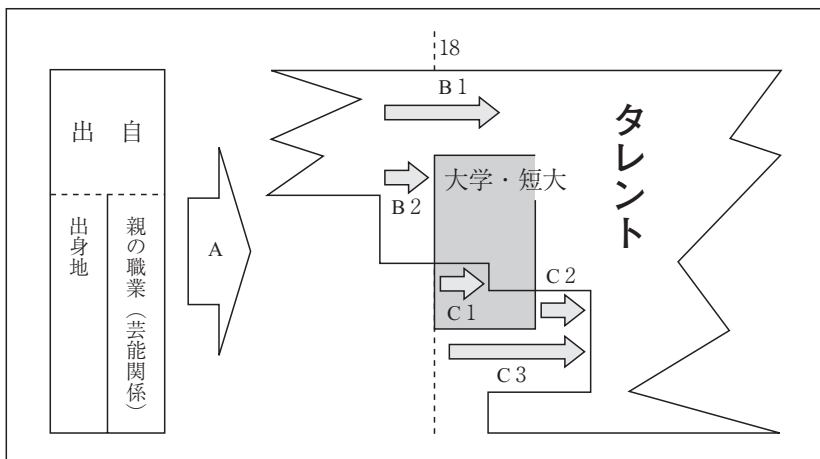


図1 タレント分析の概念図

一時の年齢による差異も考慮しながら検証したい。

なお、このうち「親（祖父母）の職業（芸能関係）」を用いる点について補足しておきたい。これについては、芸能関係の職に就く親（家庭）の文化資本のもと、タレントとしての資質を伸ばしたという解釈、芸能関係で働く親を職業モデルとしてタレントを志望し、実際にタレントになり得たという解釈、あるいは「親のコネによってタレントになった」という捉え方も可能であろう。いずれにせよ、世代間移動に関する視点を含むものである。

もうひとつの視点は、学歴(大卒・短大卒)および専攻分野についてである。タレントデビューに至る年齢はさまざまであるが、大学・短大に進学するかどうかは一つの分岐点であろう<sup>4)</sup>。

まず、18歳以前にタレントデビューをしている者にとっては、大学・短大に進学する意義がどれほどあるのだろうか。図1でいえば、B1とB2のいずれを選択するのであろうか。初職としてすでにタレントに就いており、それがいわゆる「実力」に裏付けられた職業であり、そのままタレント活動を続けるのであれば、大学・短大に進学する必要性は低く、B1を選択するだろう。逆に、大学・短大への進学になんらかの意義を見出すタレントは、B2の進路をとるであろう。進学動機に関するデータはないが、すでにタレント活動をしている者と大学・短大への進学との関係については、興味深い点である。

また、18歳以降にデビューした人にとっては、大学・短大での生活・活動はどれほどの意義があったのだろうか。入学以前からタレントを志向し、大学・短大に在籍しているあいだ、タレントになるため精力的に活動していた者もいるかもしれない。大学・短大在学中に、タレントを志すようになった者もいるだろう。タレントを志望した時期や在学中の活動状況に関するデータはないが、高等教育を受けること、少なくとも大学・短大に在学することが、タレントになることとどれほど関連があるのかを考えるうえで、学歴との関連について調べることにしたい。すなわち、図1でいえば、大学・短大在学中にデビューした者(C1)あるいは大学・短大卒業後にデビューした者(C2)と、



大学・短大を経由せずにタレントになった者（C3）とに分かれるのである。

こうした学歴のほか、大学・短大における専攻分野についても分析を試みる。専攻分野としては、演劇や芸術に関する学部学科かどうかを取り上げる。18歳までにすでにデビューしている者が演劇・芸術を専攻するのであれば、それはタレント活動をさらに充実させる意図が感じられるものであり、まだデビューしていない者であれば、こうした専攻分野を学ぶことによって、タレントデビューを果たしたいという意図が感じられる。

このように、タレントという職業選択が18歳以前か以後かによって、大学・短大への進学や専攻分野の選択に求めた意味も異なると考えられる。また、こうした大学・短大への進学に出自（出身地・親の職業）がどう関係しているのかについても、確認しておきたい。

### (3) 分析対象の特徴

生年やデビュー年、出身地、学歴などのデータがすべて揃った者は必ずしも多くないが、分析対象とするタレントの特徴について触れておこう。1985年以前生まれの「タレント・俳優（女優）」の主な内訳は、以下のとおりである<sup>5)</sup>

- ① 性別 男性：1,765名（46.8%）、女性：2,008名（53.2%）
- ② 生年区分
  - (a) 1945年以前生まれ（戦前生まれ）：610名（16.2%）
  - (b) 1946～60年生まれ（幼少時にテレビにあまり親しんでおらず（1953年テレビ放送スタート）、15歳（18歳）時に高校（大学）進学率上昇期を迎えた人々）：747名（19.8%）
  - (c) 1961～70年生まれ（幼少期からテレビに親しみ（1962年時のテレビ世帯普及率48.5%）、15歳時に高校進学率が90%を超えていた人々）：822名（21.8%）
  - (d) 1971～85年生まれ（1975年にはカラーテレビが90%超普及し、テレビに慣れ親しんだ人々）：1,594名（42.2%）

③ 出身地

- (a) 首都圏（東京・神奈川・埼玉・千葉）：1,835名（50.6%）
- (b) 京阪神・中京（京都・大阪・兵庫・愛知）：626名（17.2%）
- (c) 地方<sup>6)</sup>：1,167名（32.2%）

④ デビュー時の年齢<sup>7)</sup> 18歳未満：701名（～14歳：10.2%，15～17歳：17.4%），18歳以降：1,838名（18～21歳：35.8%，22～25歳：25.3%，26歳～：11.2%）

⑤ 学歴<sup>8)</sup> 大学・短大卒：1,179名（49.0%），その他：1,225名（51.0%）

⑥ 専攻分野（大卒・短大卒のみ） 演劇・芸術系：178名（17.8%），その他：823名（82.2%）

出身地や学歴に関する分析は後述するため、ここでは性別、生年（世代）、デビュー時の年齢について少し補足しておこう。まず、男女比はほぼ半々であるが、表1に示すように、生年・デビュー年齢・学歴について大きく異なっている（いずれも0.1%水準で有意）。つまり、女性タレントの大半は1971～85年生まれであり、デビューの年齢も女性タレントの方が早い傾向にあり、男性タレントの方が高学歴なのである。

このことから、タレントという労働市場において、若い女性の需要が非常に高く、学校在籍中にデビューする女子生徒も少なくないことが看取できる。裏を返せば、女性タレントの場合、30代以降も活躍し続けることが難しいともいえるのである。

次に生年についてみると、1971～85年生まれのタレントが最も多く、

表1 性別と生年・デビュー年齢・学歴との関係

	生 年				デビュー年齢		学 歴	
	～1945	1946～60	1961～70	1971～85	18歳未満	18歳以降	大卒・短大卒	それ以外
男	22.2%	24.2%	24.7%	28.9%	16.7%	83.3%	56.5%	43.5%
女	10.9%	15.9%	19.2%	54.0%	37.3%	62.7%	41.3%	58.7%
全体	16.2%	19.8%	21.8%	42.2%	27.6%	72.4%	49.0%	51.0%

42.2% (1,594名) を占めるに至っているのだが、その比率を押し上げているのは女性である。また、デビュー年齢についていえば、18歳になる前に27.6%の者がデビューしており、25歳までに88.7%がデビューに至っている。もう少し細かくいえば、最も多いデビュー年齢は20歳(260名, 10.2%)であり、19歳(241名, 9.5%)、21歳(210名, 8.3%)と続いている。すなわち、タレントの3割に近い者が、高校卒業後3年間のあいだにデビューを果たしているのである。他方、30歳以降のデビューは3.3%にしかすぎず、最も遅いデビュー時の年齢は、47歳であった。

ちなみに、生年とデビュー年齢との関係を調べると、18歳になる前にデビューしているタレントは、1945年以前生まれで15.9%、1946～60年生まれで18.3%、1961～70年生まれで22.5%なのに対して、1971～85年生まれでは42.2%に及んでいる(0.1%水準で有意)。タレントデビューの時期が若年化の傾向にあること、タレント活動の継続が難しいことが読み取れよう。

### 3 分析結果

#### (1) タレントの出自

##### ① 出身地について

前掲したように、首都圏出身のタレントは1,835名と約半数に及んでいる。京阪神・中京の出身者と合わせると、全体の3分の2を占めるほどである。ここではさらに、性別・生年別に出身地をみておこう(表2)。

性別については、男女ともに首都圏出身者が多いのだが、女性タレントの方がその傾向はつよく、一方、男性タレントでは、地方出身者が35.5%で、女性よりも高い比率を示している。

生年別では、必ずしもリニアな関係がみられないものの、戦後生まれで高度経済成長を経験した世代においては地方出身者が比較的多いのに対して、それ以降は、徐々に首都圏出身者が増加傾向にあるようである。特に1971年生まれ以降では、首都圏出身者が過半数を占めており、地方出身者は3割を下回っ

表2 性別・生年別にみた出身地の関係

		首都圏	京阪神・中京	地方	
性別	男	45.9%	18.6%	35.5%	***
	女	54.7%	16.1%	29.2%	
生年	～1945	49.3%	17.6%	33.1%	***
	1946～60	42.4%	18.0%	39.6%	
	1961～70	49.1%	18.6%	32.3%	
	1971～85	55.6%	16.1%	28.3%	
全体		50.6%	17.3%	32.2%	

注：表中の\*は5%水準，\*\*は1%水準，\*\*\*は0.1%水準で有意であることをそれぞれ示している（以下同様）。

ている。今後、地方出身者にとって、タレントになることが狭き門になりつつあると推察される。

また、デビューした年齢と出身地の関係を調べたところ、18歳以前にデビューしたタレントは、京阪神・中京（26.7%）や地方（20.3%）に比べると、首都圏出身者で33.7%と高い比率を示している（0.1%水準で有意）。デビュー時期が若年化傾向にあると先に示したが、その点においても、首都圏の児童生徒に有利に働いており、逆に地方の児童生徒にとっては不利な状況にあると考えられる。

では、タレントの数が、首都圏、京阪神・中京、地方のあいだで大きく差があるのはどのように解釈できるであろうか。表3は、1940～1985年の人口の推移を5年間隔で示したものである（総務省統計研修所編より）。タレントになる機会が地域的に均等に開かれているとすれば、この人口比率とタレント数

表3 人口の推移

(単位：千人)

	1940	1945	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985
首都圏	12,740	9,368	13,051	15,424	17,864	21,017	24,113	27,042	28,697	30,273
京阪神・中京	12,911	10,085	12,391	13,943	15,610	17,869	19,924	21,620	22,367	22,988
地方	47,463	52,545	58,673	60,710	60,828	60,323	60,628	63,278	65,996	67,788
全体	73,114	71,998	84,115	90,077	94,302	99,209	104,665	111,940	117,060	121,049

の分布とは似かよって然るべきなのだが、人口比率に照らし合わせてみると、首都圏出身のタレントが非常に多いことが分かる。ひとつには、都市部の人のほうが、タレントになる機会を多くもっているという解釈も成り立つだろう。あるいは、都市部（首都圏）での生活文化とタレント文化とが親和的であるために、タレントという職業にアクセスしやすく、また活動継続につながっているとも考えられる。

## ② 親（祖父母）の職業について

テレビ・タレントのうち、親（祖父母）が芸能関係の職業だという人は、5.8%（220名）であった。つまり、「2世タレント」と言われるような、芸能関係で働く親を持つタレントは、20人に1人という計算になるのである。

性別やデビュー年齢（18歳未満／以降）については統計的有意差がみられなかったものの、表4に示すように、出身地については、首都圏（8.4%）と京阪神・中京（5.9%）に比べ、地方（1.6%）の出身者が少ないのである。これは、タレントである親（祖父母）がすでに首都圏や京阪神・中京で生活しているためと考えられる。

また生年区分についてみると、1945年以前生まれの人で8.9%いるのに対して、1946年以降の各区分では5%台であり、「2世タレント」の比率は、戦後生まれで低くなっている。この点については、タレントになる機会が広く開かれるようになったという解釈も成り立つだろう。

表4 親の職業（芸能関係）と性別・出身地・デビュー年齢・生年の関係

	性別		出身地			***	
	男	女	首都圏	京阪神・中京	地方		
親もタレント	6.1%	5.6%	8.4%	5.9%	1.6%		
それ以外	93.9%	94.4%	91.6%	94.1%	98.4%		
	デビュー年齢		生年（世代）				**
	18歳未満	18歳以上	～1945	1946～60	1961～70	1971～85	
親もタレント	8.6%	6.9%	8.9%	5.0%	5.6%	5.2%	
それ以外	91.4%	93.1%	91.1%	95.0%	94.4%	94.8%	

## (2) タレントの学歴・専攻分野

### (A) 全体の分析

大学・短大に進学するタレントはどれくらいいるのだろうか。先に示したように、進学者は1,179名おり、全体で49.0%と高い数値を示している。表5では生年別に学歴との関連を示しているが、いずれの世代でも40%を超えており、戦前生まれの世代でさえ44.1%となっている。大学・短大への進学率<sup>9)</sup>は、たとえば1945年生まれの人々が18歳を迎える1963年で15.4%であり、40%を超えたのは1993年、そして1985年生まれの人々が18歳を迎える2003年で49.0%である。それと対比させると、タレントの大学・短大への進学率はどの世代でも上回っていること、とりわけ高年齢層においてきわめて多いことが明白である。

これらのタレントについて性別等との関連を調べたところ、出身地による違いは見られなかったが、表1に示したとおり、進学者の比率は、女性タレント(41.3%)に比べて男性タレント(56.5%)の方が高い。ただ、女子の大学・短大への進学率が男子をはじめて上回ったのは1989年(男子:35.8%, 女子36.8%)のことであり、生年による違いが関係するとも考えられる。そこで、生年区別に性別と学歴の関係を調べたところ、1945年以前生まれおよび1945~1960年生まれでともに0.1%水準、1961~1970年生まれで5%水準の有意差が見られたのに対し、1971~85年生まれの人では統計的有意差がみられなかった。タレントの学歴と性別の関係については、全体の進学率における男女差と同様の傾向にあるといえるだろう。

また、親の職業(芸能関係)との関連を調べると、親が芸能関係の職業についている場合は、56.0%の人が大学・短大へ進学しており、そうした職業以外の親をもつタレントの場合(48.5%)よ

表5 生年別にみた高等教育進学者の割合

	大卒・短大卒	それ以外
~1945	44.1%	55.9%
1946~60	49.7%	50.3%
1961~70	51.8%	48.2%
1971~85	50.5%	49.5%
全体	49.0%	51.0%

\*

りもその比率は高いのである（5%水準で有意）。

では次に、専攻分野に注目したい。大学・短大に進学した者のうち、演劇・芸術系の学部学科に進学したのは178名である。その多くは、日本大学芸術学部（82名）、桐朋学園短期大学芸術科／演劇科（33名）、早稲田大学文学部演劇学科（17名）である<sup>10)</sup>

生年別・出身地別ともに、統計的有意差は見いだせなかったが、性別および親の職業（芸能関係）に関しては、表6に示すように有意差がみられた。性別では、演劇・芸術系に進学した女性タレントが5.4%であるのに対して、男性タレントでは10.8%の人が進学しており、大学・短大進学者のみに限定しても、男子タレントの約5人に1人が演劇・芸術系に進学しているのである。親の職業（芸能関係）に関しても、いずれを分母にした場合でも、親がタレントである場合、演劇・芸術系に進学する傾向にあるといえる。

なおここで、進学先の大学・短大の所在地について確認しておきたい。どの大学・短大に進学しているのかを調べてみると、首都圏の大学・短大が79.4%、京阪神・中京の大学・短大が12.9%で、あわせると9割以上を占めている。それに対して、地方の大学・短大（4.6%）と海外の大学（3.1%）は、合わせても7.7%にすぎないのである。特に、首都圏出身や京阪神・中京出身の者では、その大多数が首都圏・京阪神・中京の大学・短大に進学しているのである（首都圏出身者で96.8%、京阪神・中京出身者で96.9%）。タレントに占める首都圏（および京阪神・中京）出身者の比率が高いことは先に示したが、

表6 性別・親の職業と大学の専攻分野との関係

	演劇・芸術系	それ以外	N		演劇・芸術系	それ以外	N	
男	10.8%	89.2%	1,082	***	21.1%	78.9%	554	***
女	5.4%	94.6%	1,137		13.6%	86.4%	447	
タレント	13.4%	86.6%	172	**	24.7%	75.3%	93	*
それ以外	7.6%	92.4%	2,047		17.1%	82.9%	908	
全体	8.0%	92.0%	2,219		17.8%	82.2%	1,001	

（左表：「高卒・大卒」中の割合、右表：「大卒」中の割合）

大学・短大進学にあたってもそうしたエリアを選択しているといえる。

他方、地方出身の大学・短大進学者のうち、首都圏・京阪神・中京の大学・短大に進学した者は84.0%であり、その数値は相対的に低い。だが、その9割超が18歳以降のデビューであるため、地方出身者にとっては首都圏等の大学・短大に進学することによって、タレントデビューの機会を拡大させているといえるかもしれない。

### (B) デビュー年齢（18歳未満／以降）別の分析

#### (a) 18歳未満でデビューしたタレントについて

18歳未満でタレントデビューしている701名のうち、進学動向データが把握できたのは、表7のとおり418名である。まず学歴について調べると、そのうち、大学・短大への進学者は106名（25.4%）とほぼ4分の1であった。しかも、18歳人口全体の進学率が上昇してきたにもかかわらず、どの生年区分（世代）においてもその割合は大きく変わるものではなかったのである。18歳までにすでにタレントデビューを果たしている人にとっては、すでにキャリア選択を終え、仕事に従事していることから、高等教育に進学する意義を見出せにくいかもしれない。また、出身地や生年(世代)による違いはみられなかったが、性別では、女性の20.5%に対して、男性は36.5%の者が大学・短大に進学している（0.1%水準で有意）。この男女差について生年区分別に調べたところ、1970～1985年生まれにおいてはやはり有意差がみられなかった。

ここで、この1971～85年生まれで18歳までにデビューしているタレントに

表7 デビュー年齢別にみた進学者の割合

	学 歴		N
	大卒・短大卒	それ以外	
18歳未満	25.4%	74.6%	418
18歳以上	51.8%	48.2%	1,415
	45.8%	54.2%	1,833

\*\*\*



特に注目したい。このようなタレントについて、進学動向データがそろっているのは148名であり、そのうち45名が大学・短大に進学しているのだが、そのうち、進学先が亜細亜大学であったタレントは、約3分の1(14名)に及んでいるのである。亜細亜大学は早くから一芸一能入試を導入し、タレントの高等教育進学に先鞭をつけたともいえる。つまり、従来の学力評価のみに依拠しない入学者選抜方式が導入されたことで、進学しやすくなったというとらえ方もできるだろう。

また、親(祖父母)が芸能関係の職にあるタレントにおいて、38.8%の人が大学・短大へ進学しているのに対して、それ以外の者では23.6%しか進学しておらず(5%水準で有意)、18歳までにタレントデビューを果たしている者に限ってみても、親の職業が関連していることが分かる。

つづいて専攻分野について調べると、演劇・芸術系の学部学科に進学したというタレント自体が14名と少数であった。性別では女性が1名と少なく、1961年以降生まれの者も3名であった(ともに0.1%水準で有意)。高齢層では、男性を中心に、大学・短大における関連学科で研鑽しようとするタレントが少数とはいえ比較的いたようであるが、若年層においては皆無である。

(b) 18歳以降にデビューしたタレントについて

18歳以降にタレントデビューした者のうち進学動向データが判明したのは1,415名であり、そのうち大学・短大への進学者は733名(51.8%)と半数を超えている。生年区分についてみると、1945年以前生まれで45.7%、1946～60年生まれで52.7%、1961～70年生まれで53.5%、1971～85年生まれで57.4%と、若い世代では非常に多くの人が進学している(0.1%水準で有意)。

性別との関連はここでもみられ、女性(44.4%)よりも男性(57.8%)の方が、大学・短大に進学する傾向にあった(0.1%水準で有意)が、やはり生年区分別にみると、1970～1985年生まれにおいてのみ有意差がみられなかった。また出身地については、18歳未満でデビューしたタレントと同様、関連は見いだされなかった。

また、親の職業（芸能関係）については、18歳以降にデビューしたタレントでも関連がみられ、芸能関係の職につく親（祖父母）をもつ者は、62.7%の人が大学・短大に進学しているのである（親の職業がそれ以外の場合は50.9%であり、5%水準で有意）。

つづいて専攻分野についてみると、性別および親の職業（芸能関係）に関して有意差がみられた。性別では、演劇・芸術系に進学した女性タレントが6.8%（41名）であるのに対して、男性タレントでは12.0%（85名）の人が進学しているのである（0.1%水準で有意）。また、芸能関係の職業で働く親をもつ人では、全体の17.5%（18名）が演劇・芸術系に進学しており、そうでない人（8.9%）よりもその比率が高いのである（1%水準で有意）。

#### 4 ま と め

本稿の主な分析結果を要約すると、次のとおりである。

- ① 約9割のタレントが25歳までにデビューしており、特に女性では、タレント数（比率）・タレントデビュー時期ともに若年化傾向にある。
- ② どの世代においても、タレントは首都圏をはじめとして都市部出身が多い。
- ③ 親（祖父母）が芸能関係の職業に就いていることは、戦前生まれでは比較的關係がみられたが、戦後生まれではその比率は下がっている。
- ④ 大学・短大への進学を経験しているタレントは全体的に多い。18歳までにデビューを果たしている者では進学者が少ないが、デビューが18歳以降のタレントでは、過半数が進学している。
- ⑤ 大学・短大への進学を経験しているタレントは、親が芸能関係で働いている場合の方が高い割合を示している。
- ⑥ 演劇・芸術系の学部学科に進学する者は、デビュー年齢に関係なく、男性の方が多い。また、親が芸能関係の職に就いている場合にも、その傾向がよい。

これらの分析結果から、タレントというキャリアを追求するうえで、その機会が等しく開かれているかということ、少なくとも出身地に関して見る限り、疑わしいものである。首都圏の大学・短大に進学した後にタレントデビューした地方出身者が多いことから考えてみても、地域的な有利／不利があると推察される。

また、「タレントになるのに学歴は必要ない」という点について、〇〇大学卒といった「肩書き」や「学閥」に関しては、本分析から言及できるものではない。ただ、大卒・短大卒のタレントが大半みられたことから、「大学・短大に通うこと」がタレントという職業と一概に無関係とは言い難いと考えられる。大学・短大への進学者のうち、演劇・芸術系に進んだというタレントは6人に1人の割合であり、専門・専攻が直接関連していることも否定できないのだが、とはいえ必ずしも多数を占めているわけではない。つまり、大学教育をつうじて、幅広い知識や教養を身につけ、視野を広げることが、タレントとしての能力形成に寄与しているのではないだろうか。

また、そのほか、タレントを目指す者については、サークル活動や学外の活動をつうじて、演劇を学んだり、オーディションに参加していたことも推察される。これは、大学・短大に在籍し種々の活動を容認されたことによる効果といえるだろう。タレントは特殊な労働市場であり、中高生は芸能関係の職業に学歴・学力が必要ないと考えがちであるが(片瀬 2005)、モラトリアム期間に大学・短大で種々の諸経験を積み重ねることが、タレントになるうえでインパクトをもっていると考えられるのである。

なお、これはあくまでも一つの可能性であるが、いわゆる「2世タレント」に大学・短大進学者が多いのは、芸能関係で働く親が、能力形成の点で進学する意義を見出しているためかもしれない。また、進学させるだけの経済的余裕があったことも一因と推察される。

以上、本稿ではテレビ・タレントの出自や学歴に関して分析を試み、その結果を素描してきた。今後はさらにデータを補完し、詳細な分析・検討を加えて

いっただけでなく、タレント（俳優・女優）のほか、歌手やミュージシャン等についても検討していきたいと考える。

### 注

- 1) ちなみに、鴻上尚史氏は、大学（法学部）に進学し、大学在学中に劇団を旗揚げ、現在は劇作家・演出家として活躍中である。彼の挙げる諸能力は、劇団にかかわり、多くの俳優に接するという実際の経験に基づいたものといえるだろう。
- 2) 広辞苑によれば、「タレント」の意味の一つとして「才能のある人の意で、テレビ・ラジオ等の職業的出演者」とある。「テレビ・タレント人名事典」には、活動分野として、「俳優（女優）」、「タレント」のほか、「モデル」、「歌手」、「アナウンサー」、「落語家」、「コメディアン」など多数挙がっている。分析対象とする人名事典においては、活動分野を問わず、テレビに出演する職業人を「テレビ・タレント」と広義にとらえ、そのなかの一活動分野として狭義の「タレント」が位置づいている。  
なお、この人名辞典の掲載基準は明確にされていないが、発行の前年（2003年）にテレビにある一定以上登場した者、あるいは、それまで継続的にテレビで活躍してきた者と推察される。学歴など多くのデータが記載された書籍であり、タレント分析を試みる資料として、十分な価値があると考えられる。
- 3) 親の職業については、タレント・俳優（女優）だけに限定せず、それに類する職業、関連する職業として、ひろく芸能関係の職業を取り上げる。たとえば、歌手や劇作家などが含まれている。
- 4) 図1では、大学・短大への進学を18歳からと図示しているが、これはあくまでも概念図であり、必ずしも18歳からとは限らないものである。ただし、分析データ上、進学時の年齢が不明であること、また高校卒業時が進学的意思決定に大きくかかわることから、18歳を一つの分岐点に設定している。
- 5) 本稿では分析対象から外したが、1986年以降生まれのタレントは262名である。また、出身地や学歴については、すべてのデータが揃っているわけではなく、出身地は3.8%、学歴は36.3%の者が不明である。また、大学・短大進学者のうち、大学名や専攻分野が揃っている者はさらに限られている。これらに関する分析で有効数が少なくなっている点、また分析結果の総数が異なる点については予め断っておく。
- 6) 地方出身者には、海外出身者も含めており、戦前の「満州」なども含む。
- 7) 大学・短大進学決定前にすでにタレント活動をしていたかどうか、という観点から、18歳未満／以降で区切った。厳密に言えば18歳には高校3年生も含まれうるのだが、便宜上この区分けを用いることとする。
- 8) 中退者は、高等教育を受けることを一旦は決断した人たちであり、何らかの期待を持って進学した人である。と同時に、期間はさまざまであろうが、大学・短大に少なからず在

籍していた人たちである。そうした点から、中退者も「大卒・短大卒」に含めることとする。

- 9) 文部科学省『文部科学統計要覧』における「大学(学部)・短期大学(本科)への進学率(過年度高卒者等を含む)」とは、大学学部・短期大学本科入学者数(過年度高卒者等を含む)を3年前の中学校卒業生数及び中等教育学校前期課程修了者数で除した比率のことを指す。なお、「過年度高卒者等」とは、高等学校または中等教育学校卒業後1年以上経過した者等のことである。
- 10) 学部学科までデータがそろっている大卒・短大卒者は少ないため、芸術・演劇系学部学科への進学率数は、実際にはもう少し多いのかもしれない。なお、大学名まで判明しているタレントは1,155名であり、そのなかで多いのは、日本大学(125名)、早稲田大学(108名)、明治大学(53名)、桐朋学園短期大学(39名)である。

### 参 考 文 献

- 相徳昌利『歌手・タレントという仕事』中央経済社, 1999
- ベネッセ教育研究所「第1回子ども生活実態基本調査報告書」2004
- 本田由紀『若者と仕事―「学校経由の就職」を超えて―』東京大学出版会, 2005
- 荻谷剛彦『階層化日本と教育危機―不平等再生産から意欲格差社会へ―』有信堂高文社, 2001
- 片瀬一男『夢の行方―高校生の教育・職業アスピレーションの変容―』東北大学出版会, 2005
- 香山リカ『就職がこわい』講談社, 2004
- 小杉礼子『フリーターという生き方』勁草書房, 2003
- 鴻上尚史『俳優になりたいあなたへ』筑摩書房, 2006
- 文部科学省『文部科学統計要覧』国立印刷局
- 長山靖生『若者はなぜ「決められない」か』ちくま新書, 2003
- 岡本博・福田定良『現代タレントロジー』法政大学出版局, 1966
- 佐藤俊樹『不平等社会日本』中公新書, 2000
- 総務省統計研修所編『第58回 日本統計年鑑』総務省統計局
- 山田昌弘「援助を惜しまない親たち」宮本みちこ・岩上真珠・山田昌弘『未婚化社会の親子関係』有斐閣, 1997, 73-96頁
- 山本健翔『なるにはBOOKS15 俳優になるには』ペリかん社, 2001

(本稿は、2007年度に交付を受けた松山大学特別研究助成による研究成果の一部である。)